

## 地域のブランド・マネジメントにおける価値共創プロセス

### —地域の持続可能な発展に寄与する取り組み事例からの検討—

保土田 玲子<sup>1</sup>

## Value Co-creation Processes in Place Brand Management —Analysis of a Case Study Contributing to Sustainable Regional Development—

HODOTA Reiko

### 1. はじめに

「地方創生」については、行政の政策における取り組みとともに、学術的領域としても多岐にわたり研究が行われているが、「持続可能性」は、キーワードとして重視されている。

矢口（2021）は、新たな学術領域である「地域経営学」について論じているが、地域経営学の目的・目標について「地域の様々な価値や住民満足度、持続可能性の確保・向上に寄与すること、持続可能な地域社会の形成に寄与すること」であるとしている<sup>2</sup>。

マーケティングの研究領域においても、「ブランド・マネジメント」理論が「地域」に適用され論じられているが、和田ら（2009）は、「地域ブランドの目指す目的とは、購買や観光が中心となった経済的拡大のみではなく、地域への誇りや愛着の創造、そして地域の持続的発展である<sup>3</sup>」と述べており、地域のブランド・マネジメントにおいても持続可能な発展が重要視されている。

地域ブランド・マネジメントにおける先行研究（第3章で後述）を概観すると、地域ブランド論と製品等のブランド論との違いとして、活動主体・ターゲットの多様性が、地域のブランド・マネジメントの大きな特徴として挙げられ、それゆえ、活動主体・ターゲット等の複雑性及びマネジメントや体制の構築が課題として議論されている。このような課題が、効果的な仕組みづくりにより解決され、さらに地方創生にかかわる主体間の相互交流による価値共創が生じていくことが、地域ブランディングと地域の持続可能な発展において重要であると考えられる。

國領（2011）は、プラットフォーム論（第3章で後述）について、「トップダウンの『命令・統制型』の社会システムから、自律・分散・協調型の社会への転換」つまり「階層的に協働の統合を行うモデルに対して、プロセスやインターフェースを共有することで、現場の

---

\*本研究は、2023年度昭和女子大学研究助成を受けている。

<sup>1</sup> 昭和女子大学現代ビジネス研究所 助教

<sup>2</sup> 矢口（2021）p.1.

<sup>3</sup> 和田ら（2009）p.19.

イニシアチブで進む取り組みが自己組織的に結合していくモデルへの転換」を志向し、論じるものであるという見解を述べている<sup>4</sup>。地方創生においても、その転換が、行政において既に広く使用されている「協働」という概念のもと、様々な取り組みが推進されていると言える。

本研究は、地域の持続可能な発展を実現していくための取り組みにおいて、いかなる要素が価値共創を生じさせるかを明らかにし、今後の地方創生における取り組みにおいて示唆を行うことを目的とする。本稿における事例分析の対象としている神奈川県足柄上郡大井町（以下大井町）の地域ブランド・マネジメントにおいては、豊かな自然や農作物などを観光資源として、交流人口を増やすべく、体験価値の提供及び、体験の前提となる「認知度」の向上に向けて、積極的なプロモーションの推進が求められている。本稿では、こうした目標に向かって、協働の取り組みをしている大井町の「一般社団法人神奈川大井の里体験観光協会（以下大井の里体験観光協会）」と「ゆめの里育て隊」の事例において、定性調査の結果の記述と考察を行う。

## 2. 研究方法

本研究では、「地域の持続可能な発展に寄与する取り組みにおいて、いかなる要素が価値共創を生じさせるか」というリサーチ・クエスチョンに対し、先行研究レビュー及び定性調査により仮説を導出し、定量調査を通じて、仮説の検証を行う。先行研究レビューにおいては、マーケティングの領域を基軸として、地域ブランド・マネジメント論を中心にレビューを行い、プラットフォームの概念を援用して検討を行う。

その中で、本稿では、定性調査の結果の記述と考察を中心に行う。次の段階として、先行研究と定性調査の結果から仮説を導出し、定量調査（Web アンケート調査）において検証を行うことで、理論の構築を試みる。

### 2-1. 定性調査の概要

事例として、昭和女子大学が包括協定を結び、本学学生の地域創生プロジェクトを通じて協働している大井町を対象とし、大井町役場の職員への事前ヒアリング及び、ゆめの里育て隊メンバーへの半構造化インタビューを実施した<sup>5</sup>。定性調査の概要は以下の通りである。

表 1 調査の概要①事前のヒアリング調査

目的	持続可能な発展に寄与する地域の活動で、大井町の住民や組織を主体とした活動について経緯や内容とともにヒアリングする。
調査方法	ヒアリング調査
対象者	大井町役場地域振興課 宇田川晶彦課長 平野潤副課長
日時	2023年8月24日 11:30-13:30

<sup>4</sup> 國領（2011）p.4.

<sup>5</sup> 本インタビューは、昭和女子大学倫理審査委員会の承認を得て、実施したものである。

表 2 調査の概要②ゆめの里育て隊の隊長・隊員へのインタビュー調査

目的	「ゆめの里育て隊」の活動への参加のきっかけ（動機）、継続の理由、活動目的や活動内容をインタビューする。
調査方法	半構造化インタビュー／フォーカスグループインタビュー
対象者	ゆめの里育て隊 隊長 1 名 隊員 5 名 年齢：60 代 2 名 70 代 2 名 80 代 2 名 性別：男性 6 名 （上記の他、大井町役場職員 5 名が同席）
日時	2023 年 11 月 18 日 11:00-12:00

## 2-2. 本稿における定性調査結果記述の方法

上記①の事前ヒアリングにおいては、大井町役場地域振興課で地域振興に携わっておられる宇田川晶彦課長と平野潤副課長に協力いただいた。大井町における住民や組織が主体となっていて行っている、持続可能な発展に寄与する地域の活動についてのヒアリング調査の結果、主に「大井の里体験観光協会」及び「ゆめの里育て隊」の 2 つの事例について知ることができた。なお、その際のヒアリング内容については、録音を行い、次に文章化して記録した。前者の「大井の里体験観光協会」の事例については、4 章 2 節において、ヒアリング内容を分析し、4 つの観点から整理したうえで記述を行う。なお、補足情報が必要な場合は、Web サイトや資料等から引用し、記述する。後者の「ゆめの里育て隊」の事例については、隊長及び隊員の方々を対象に、半構造化インタビューを行い、その内容を 4 章 3 節で記述するが、4 章 2 節においては、町役場職員としてのどのように関わっているか、その協働のあり方について、ヒアリング内容を分析の上、2 つの観点から整理した上で、記述する。

上記②のゆめの里育て隊を対象とした半構造化インタビューにおける記録と記述の手順は、以下の通りである。まず、インタビューの際には録音を行い、次に文章化して記録した。その後、本稿の付録に記載の表の通り、インタビュー時に問いかけた質問とその回答（発話）を表に整理した。なお、付録に掲載している記録については、極力インタビュー時の発話のまま記述をしているが、内容をわかりやすくするために、一部補足・省略等を行っている。また、テーマから大きく脱線した内容や個人情報等が含まれる箇所については、省略した。本稿の 4 章 3 節における記述の方法としては、半構造化インタビューの結果から共通項を「要素」として抽出し、その要素ごとに、それらを裏付ける発話を付録の表から引用する形で記述する。

近藤（2009）は「質的研究は対象者の主観的な意味世界を明らかにすることを目的とし、「社会学は対象者の一次的意味構成を明らかにし、それを第一次資料として研究者の学問的視点から二次的意味構成をする」と説明している。なお、その「一次的意味構成」については「対象者が自分の主観に基づいて意味を構成していることを指す」とし、「調査者や研究者の学問的視点からする『二次的意味構成』と区別」している<sup>6</sup>。本稿では、定性

<sup>6</sup> 近藤（2009） p.2.

調査結果の記述については、「一次的意味構成」を明示することを目的に行う。「二次的意味構成」については、本研究における次の段階で検討を行うこととする。

### 3. 地域ブランド・マネジメントとその課題

地域ブランドについて、和田ら（2009）は「その地域が独自に持つ歴史や文化、自然、産業、生活、人のコミュニティといった地域資源を、体験の『場』を通じて、精神的な価値へと結びつけることで、『買いたい』『訪れたい』『交流したい』『住みたい』を誘発するまち<sup>7</sup>」と定義している。また、Zenker & Braun（2010）は、地域ブランド（Place Brand）<sup>8</sup>について、「地域（Place）の視覚的、言語的、行動的表現に基づく消費者の心の中の連想のネットワークであり、地域の関係者の目的、コミュニケーション、価値観、一般的な文化、そして全体的な場のデザインを通して具体化される<sup>9</sup>」と説明している。上記に挙げた和田ら（2009）及び Zenker & Braun（2010）の定義は、共に、地域ブランドは、消費者が抱く思いやイメージであり、それらの形成やそれに依拠した行動は、地域の関係者が設計して具現化させていく取り組みを行うものであるという考え方に基づいていると言える。

一方、徳山ら（2017）は、各地でのブランディングの取り組みにおいて、「目指すべきアイデンティティの設定が難しく、主体となるアクターも多種多様であり、それぞれが独自の目標を持っているため共通の目標を持つことが難しい」という点、そして「ターゲットを設定することが難しく、その結果、オールターゲットに陥りやすい」という点などを課題として指摘している<sup>10</sup>。また、田中ら（2012）は、地域ブランドのマネジメントを企業の製品ブランドと比較して「地域ブランドの形成過程において、目的が地域の歴史・文化、地理的環境、社会状況等と密接に結びついている点や、地域ブランドのマネジメントにかかわる主体・アクターが複合的で多様に構成される点、対象となるコミュニケーションも多様なターゲットで異なる点」において、「はるかに複雑」であり、「全く異なる」と述べており<sup>11</sup>、これらの指摘の通り、活動主体・ターゲット等の多様性が、地域のブランド・マネジメントにおける大きな特徴であり、それゆえ、多様なアクターの効果的なマネジメント及び相互交流による価値共創が地域ブランディングにおいて重要である。Grönroos & Gummerus（2014）によると価値共創（Value co-creation）は「共創プラットフォームで発生するジョイント・プロセスである<sup>12</sup>」と説明されており、また、Lusch and Vargo（2014 井上監訳・庄司・田口共訳 2016）は「アクター（Actor）」という用語を使用し、企業や顧客など、様々なアクターが共通目的を持ち、アクター間の相互作用により価値共創が生じるという考え方を示唆して

---

<sup>7</sup> 和田ら（2009） p.4.

<sup>8</sup> 地域ブランド論は、海外では Place Branding として近年、特に注目を集めている分野であり、日本との大きな違いは、「産品」ではなく「場所」すなわち「地域そのもの」を研究対象としていることである（徳山ら（2017） p.173）。

<sup>9</sup> Zenker and Braun（2010） p.3. 和訳は筆者による。

<sup>10</sup> 徳山ら（2017） p.173.

<sup>11</sup> 田中ら（2012） p.41.

<sup>12</sup> Grönroos and Gummerus（2014） p. 210. 村松（2015） p. 80 より和訳を引用。

おり、こうした考え方の地方創生への取り組みにおける適用においては、親和性は高いと考える。

國領（2011）は、「プラットフォーム」の概念について「多様な主体が協働する際に、協働を促進するコミュニケーションの基盤となる道具や仕組み<sup>13</sup>」と定義し、その設計変数として、①コミュニケーション・パターンの設計、②役割の設計、③インセンティブ設計、④信頼形成メカニズムの設計、⑤参加者の内部変化のマネジメントの 5 つを提示している<sup>14</sup>。その中でも「インセンティブの設計は、プラットフォームにとって決定的に重要なメンバーの自発的参加を促すものとして非常に重要である<sup>15</sup>」としており、それは、「経済的な利得である場合もあれば、参加者の精神的な満足など金銭には換算できない報酬、あるいは両者の混合である場合もある<sup>16</sup>」と指摘している。なお、ここでのプラットフォームは、インターネット上のものに特化したものではなく、多様な主体の対面でのつながりにおいても用いられている。

本研究では、「プラットフォーム」の概念を援用しながら、地域の持続可能な発展を実現していくための取り組みにおいて、多様なアクター間の相互作用により価値共創を生じさせていくためには、どのような仕組みとプロセスが必要かについて、以下に記述する大井町の事例を通じて、検討を行う。

#### 4. 大井町を対象とした事例分析

本稿では、大井町における取り組みを事例として、大井町役場職員へのヒアリング調査、ゆめの里育て隊への半構造化インタビュー調査を行った。なお、昭和女子大学は、大井町にある当大学の研修施設「東明学林」を活用し、「まちづくり、教育活動、観光資源の活用と情報発信などに継続的に協力していく」ことを目標として 2021 年 7 月 9 日に大井町、松田町とそれぞれ「連携協力に関する包括協定」を締結し、この協定締結を機に、プロジェクト型学修に取り組みが開始された<sup>17</sup>。

##### 4-1. 大井町の概要

大井町は、神奈川県西部、足柄上郡の東部に位置し、南は小田原市、西は酒匂川を境として開成町に、北は松田町と秦野市に、東は中井町に、それぞれ接しており、東京都心からは約 70km の距離にある<sup>18</sup>。大井町の人口は、2010 年以降、減少傾向にあり、2020 年 1 月

---

<sup>13</sup> 國領（2011）p.1.

<sup>14</sup> 國領（2011）p.6.

<sup>15</sup> 國領（2011）p.8.

<sup>16</sup> 國領（2011）p.30.

<sup>17</sup> 2021.07.20 昭和女子大学プレスリリース <https://www.swu.ac.jp/news/nid00003126.html>（2023.12.25 アクセス）筆者は、当該プロジェクトの担当教員として、2022 年度 2023 年度にわたり、携わっている。なお、昭和女子大学は、同年 7 月 16 日、千葉県館山市「望秀海浜学寮」のある千葉県館山市と連携協力に関する包括協定を締結している。

<sup>18</sup> 大井町第 6 次総合計画「つなごう！大井未来計画」（2021～2030）p.4.

1 日現在で 17,082 人である<sup>19</sup>。大井町ホームページ「町長の部屋」での小田眞一町長の挨拶には、「西は二宮尊徳ゆかりの酒匂川の松並木越しに箱根連山から日本一の山・霊峰富士を望み、南は相模湾を望む水平線、北東には丹沢山塊が眺望できる大変風光明媚（ふうこうめいび）なところ」と大井町の魅力が述べられており、また「町の 6 割が丘陵地で、温暖な気候のおかげで畑作・ミカンなどを中心とした農業が行われて」おり、「一方、4 割の平坦地は、酒匂川沿いに優良な水田地帯があり、稲作を中心に梨・イチジクなどの栽培が行われて」いることなど、大井町の特徴について紹介されている<sup>20</sup>。また大井町は、昭和 45 年、JR 東海（当時は国鉄）御殿場線大井駅の構内へ、駅員が西日除けにひょうたんを植えたのをきっかけとして、上大井駅は「ひょうたん駅」として有名になり、現在もひょうたんは、町のシンボルとして、親しまれながら、その普及活動が行われている<sup>21</sup>。

なお、小田町長は、大井町第 6 次総合計画「つなごう！大井未来計画」の冒頭挨拶において、その策定の背景として「持続可能な地域社会を実現し、未来へとつなぐため」と述べており、さらに「これまで培ってきたまちづくりを継承しつつ、町の特性や地域資源を活かして、さらなるまちづくりを推進」とした上で、「私は、まちづくりの理想の姿はオーケストラのようだと感じています。多くの個性あるプレイヤーが自律と調和の精神を大切に、それぞれの役割を果たして、心地よい大井町サウンドを皆様と共に奏でながら、基本構想に掲げるまちづくりの目標『みんなでつなぐ大井の未来』の実現に向けて全力を注いでいくと決意表明している<sup>22</sup>。なお、大井町では、「これからの町政運営、まちづくりにおいては、町民と町（行政）、あるいは町民同士が「協働」により、それぞれの特性を生かしながら、ともに取り組んでいくことが重要<sup>23</sup>」であるという方針のもと、大井協働ガイドラインを提示している。そこでの協働は、「住民や町民活動団体（自治会・NPO 等）、事業者、学校、町（行政）など、様々な立場の人たちが、それぞれの能力を生かし、対等な立場で、協力・連携しながら、まちづくりに取り組むこと」と定義されている<sup>24</sup>。さらに、大井町では、持続可能な開発目標（SDGs）のもと、「協働」において目指すゴールは、主に「11 住み続けられるまちづくりを」及び「17 パートナリーシップで目標を達成しよう」と設定している。

---

(<https://www.town.oi.kanagawa.jp/uploaded/attachment/6651.pdf>) 2023.12.25 アクセス

<sup>19</sup> 大井町第 6 次総合計画「つなごう！大井未来計画」（2021～2030）p4.

(<https://www.town.oi.kanagawa.jp/uploaded/attachment/6651.pdf>) 2023.12.25 アクセス

なお、大井町ホームページ <https://www.town.oi.kanagawa.jp>(2023.12.25 アクセス)によると 2023 年 11 月末日時点で、総人口 17,321 人、男 8,576 人、女 8,745 人、世帯数 7,459 世帯と公表されている。

<sup>20</sup> 大井町役場ホームページ「ようこそ町長の部屋へ」

(<https://www.town.oi.kanagawa.jp/site/mayor-room/>) 2023.12.25 アクセス

<sup>21</sup> 大井町観光サイト「ひょうたん」(<https://www.town.oi.kanagawa.jp/site/kanko/hyoutan-kanko.html>) 2023.12.25 アクセス

<sup>22</sup> 大井町第 6 次総合計画「つなごう！大井未来計画」（2021～2030）「ごあいさつ」

(<https://www.town.oi.kanagawa.jp/uploaded/attachment/6651.pdf>) 2023.12.25 アクセス

<sup>23</sup> 大井町協働のガイドライン「はじめに」

(<https://www.town.oi.kanagawa.jp/uploaded/attachment/6641.pdf>) 2023.12.25 アクセス

<sup>24</sup> 大井町協働のガイドライン p.1. (<https://www.town.oi.kanagawa.jp/uploaded/attachment/6641.pdf>) 2023.12.25 アクセス

そして、「持続可能な地域社会の実現には、行政だけでなく、住民、町民活動団体、事業者、学校など、地域の多様な主体が協働によって課題の解決、まちづくりに取り組むことが重要」と、持続可能な地域の発展における協働の重要性が述べられている<sup>25</sup>。

#### 4-2. 定性調査①大井町役場職員を対象としたヒアリング調査

前項の大井町の概要に記述のとおり、大井町においては、地域の多様な主体による「協働」が地域課題の解決やまちづくりの方針として、重視されている。そこで、当該地域の住民や組織を主体とした活動について、ヒアリング調査を行った。本項においては、ヒアリングを通じて知ることができた「大井の里体験観光協会」及び「ゆめの里育て隊」の2つの事例について、ヒアリング結果を分析し、持続可能な発展に寄与する地域の活動における価値共創のプロセスとして重要と考えたポイント4点（前者の事例）及び、ポイント2点（後者の事例）から整理したうえで記述を行う。なお、補足情報が必要な場合は、Web サイトや資料等から引用して記述する。

前者の「大井の里体験観光協会」の事例についてのヒアリング内容の分析から重要と考えたポイントの1点目は、地域課題の解決につながる「協働」と「収益化」を法人設立による仕組み化により実現しているという点である。大井の里体験観光協会の設立以前は、様々な地域の困りごとに対しては、複数のボランティア組織が各々活動を行っていた。人口減少などにより今までの町づくりが困難となっていることが大きな課題であり、どのような方法で人を増やせるかということを検討した結果、「交流人口の増加」を目標に設定するとともに、大井町地域での困りごとを、多くの人に来ていただくことで、共に解決していくという仕組みづくりが、本協会の設立という形で具現化された。なお、同協会のプログラムを通じて、大井町を気に入る、関係人口になっている人もいるという。なお、同協会は、地域の困りごとを地域内外の人々の協力を得て解決していくとともに、ビジネス化することで収入を得ることができるようにしている。なお、大井町は、観光名所として有名なものがあまりないということで、豊かな自然を観光資源として自然を体験してもらおうということに注力している。収益構造としては、体験料から一部同協会の収入となり人件費等に充てられるが、大部分は農家側へ環流する仕組みとなっている<sup>26</sup>。後述の自然体験活動指導者（以下 NEAL<sup>27</sup>）が企画・提供する多様なプログラムを通じて、地域課題の解決につながるべく、

<sup>25</sup> 大井町協働のガイドライン p.3. (<https://www.town.oi.kanagawa.jp/uploaded/attachment/6641.pdf>)  
2023.12.25 アクセス

<sup>26</sup> 同組織のホームページ (<https://taikenkankou.com/aboutus.html> 2023.12.25 アクセス) では、その活動の概要を「少子高齢化等による人口減少や、コミュニティの崩壊、農地・里地の荒廃などに歯止めをかけるべく、地域資源の維持継承、循環を目的とした『体験観光』による新たな地域産業の創出を通じた地域づくりに取り組んで」いるとしており、「かながわ SDGs パートナー」として認定されている。ミッション/なすべきこととしては「二千年つづく里山」、ビジョン/あるべき姿としては「地域の困りごとを解決する『新たな地域産業』を興す」、バリュー/やるべきこととしては「持続可能な社会の実現を目指した『体験観光事業』の推進」と表明している。

<sup>27</sup> 神奈川県足柄上郡大井町の体験観光ガイドブックによると、同協会にて体験プログラムを提供する指導者は「体験活動指導者」及び「自然体験活動指導者 (NEAL)」資格を取得した者であり、定期的に救急

地域内外から協力を得ることにより協働を行っている。なお、同協会としては、NEAL の提供するプログラムの営業活動を行い集客することを役割として担っている。

2 点目は、「人」が最も大事であるとし、人を育てる仕組みづくりをしている点である。今まではボランティア活動として行ってきたが、それをビジネスとして進化させていくためには、サービスのクオリティを上げていかないといけないということ、また自然体験を提供する際の、参加者の安全確保の必要性から、NEAL の資格を取得できる数日にわたる合宿形式の講習会を開催している。なお、この講習会の参加費用は、町が補助しており、参加者は一部の負担で受講することができる。講習会受講後は、農家でのサービスを提供するにあたって、この NEAL が、先導役としての役割を果たしている。NEAL の養成支援、つまり「人づくり」に注力している。現在では、114 名が資格を取得している<sup>28</sup>。同協会のプログラムは多岐に渡るが、NEAL が毎週ミーティングを開催し企画を検討している。プログラムの例として、八重桜の花摘み体験、稲刈り体験、みかんの収穫体験、そば打ち体験、季節の竹筒ごはん炊き体験、石釜ピザ焼き体験などが企画された<sup>29</sup>。担い手が不足してきたことによって生じた地域の困りごと、例えば、みかんを収穫する人材がいない、里山が荒廃してしまうがそれを整備してくれる地域の人材がいなくなってしまうなどのような困りごとを解決するためのプログラムをつくり、都市部から人を呼び込むことを試みた。そのためには、サービスとしてクオリティが高くないと、来ていただけない。そこで、各々のプログラムにストーリーをつくり、SDGs の解決に向けたプログラムや農業体験プログラムを企画した。教育的なプログラム、特に学校側からの需要が高い SDGs のプログラムなどの企画・実施もしている。そういった体験プログラムを提供する際に、NEAL は、なぜこれをプログラムにしたのかという体験を参加者に説明している。例えば、大井町の地域から発掘された土偶や稲作の形跡などの説明をきっかけとして、その暮らしをこの先千年と残していくのが SDGs であるというようなストーリーである。

3 点目は、人と人、組織と組織などの調整・コーディネート役が必要かつ重要であるという点である。同協会の設立にあたって、複数のボランティア組織を取りまとめて設立するように提案、仕組みをつくって推進し、活性化していくように仕掛けたのは役場である。「地域のいろいろな団体を一つにまとめるという役割はやはり行政なのですよ。その辺のコーディネートは、行政が一番動きやすいのじゃないか」ということで、特産品に関しても、農業と商業は交わることはあまりないが、両方承知しているのは、やはり役場の職員だからであるという。このように、大井町役場では、補助金などを提供する以外に、人と人、組織

---

蘇生法 (L.S.F.A.) 講習会も受講している。なお、体験活動指導者とは、『環境教育推進法』に基づく人材認定等事業登録制度認定資格」であり、NEAL (Nature Experience Activity Leader) とは、「官民一体となり制定した体験活動に関する全国体験活動指導者認定制度」である。それらは、「いずれも、自然の中で感性を磨いたり、土地の伝統文化や食文化に触れたり、専門的な知識と技術をもって自然体験活動の普及や振興に貢献する指導者」と説明している（「神奈川県足柄上郡大井町のガイドブック」 p.13）。

<sup>28</sup> 2023 年度末時点。大井町役場への追加ヒアリングによる。

<sup>29</sup> 神奈川県足柄上郡大井町の体験観光ガイドブック pp.4-7.



と組織を調整・コーディネートすることを役割として担っている。一方で、役場としては、自主的な活動を促進するために、「旗を振りすぎない」ことが重要であるという。合意形成（ワークショップ等による）を大切にし、ニーズを理解することで、モチベーションの向上や共感性を高めていることに寄与している。また、かつては住民からの提案や企画などを、町づくりの方向性と違うことができないという理由で断ることもあったが、今は異なり、地域を活性化できるように、住民の案を具現化できる環境をつくることに努めているという。人づくりと人のネットワークをつなぎあわせることで、次から次へとつながっていき、予想していなかった反応や相乗効果を起こすことがあり、そうするとまた別のものに発展していくという。例えば、同協会設立の背景においても、元々ボランティアが複数あったものを一つに統合して、ここまで実装したという部分も、その例として挙げられるが、組織と組織だけではなく、個人と個人のケースでも同じことが言えるという。いろいろなドアを持っている人とか、ネットワークを持っている人が存在し、そのようなネットワークを持った人たちがさらに人を集めるという好循環が生まれているという。その人達が様々な知り合いを連れてきて、意気投合して大井町に住みたいということにつながったり、ビジネスが始まったりというようなことにつながっていくという。全く関係がない人達、さまざま仕事を持っている人達が友達の友達というつながりで、集まってくる。とりわけ、その傾向は、芸術家、クリエイターに多くみられるという。

4点目は、精神的な充実感だけでなく対価を支払うことを仕組みに組み込んでいるという点である。本ケースでは、活動を気持ちよくやってもらうために対価を払うという仕組みづくりをしている。年齢的に60代70代は、生きがいとして、また、活動自体が好きで、活動に参加しているケースが多いように見受けられるが、もう少し若い世代（例えば40代50代）になると、生活や本業の仕事などがあるなかでの活動となるので、対価を支払って気持ちよく活動していただきたいという。また、今までは商品として扱ってこなかったものに工夫を加えて商品化するなど、地域の課題解決につながることをビジネス化していくことも大事であると考えているという。

次に、後者の事例「ゆめの里育て隊」の概要についてであるが、その活動の地「おおいゆめの里」は、山林と畑約19ヘクタールからなる地区であり、複数のボランティア組織が整備を行っていたが、平成21年、各々活動していた組織が統合し「ゆめの里育て隊」が結成された。活動理念は「自然環境を保全しながら、荒廃しつつある山林を里山に復元し、花木を適度に植栽すること」であり、その作業内容としては、「散策路の整備、集客を見込める花木の育成、そしてその維持・管理のための定期的な草刈りなど」である<sup>30</sup>。なお、おおいゆめの里においては「農業体験施設四季の里を拠点として、おおい自然園と連携した事業を展開し、当地を活用した自然観察会や学習機会の提供など」が行われている。そして「相和地域の農地で農産物収穫体験やさまざまなイベントを実施することで都市地域や近隣から

---

<sup>30</sup> 広報おおい平成23年11月1日「特集」おれたちゆめの里育て隊 p.5.

の交流人口の増加や地域農業の活性化を目指し」ている<sup>31</sup>。「ゆめの里育て隊」は主体的に活動をしており、「町と協働しながら、町も巻き込みながら」とあくまでも主語は、「ゆめの里育て隊」だというのが、大井町役場としての関わり方において、重要なポイントであると考えたポイント 2 点から整理したうえで記述を行う。

1 点目は、町役場が、観光資源のポテンシャルとしての見立てをして、このおおいゆめの里を観光資源として活用していくことを考えたという点である。町としては、ここは観光資源として、(富士山が一望できるなど) 景色はよいが、里山は荒廃しており、この場所を何とかしたいと考えていたという。このように観光資源としてのポテンシャルを見出して、観光拠点にしていくということを検討していくなかで、この活動が立ち上がったという。町政 50 周年を記念して、町民も参加して河津桜の植樹を行い、現在では 2 月中旬から 3 月上旬にかけては早咲き桜が咲き、桜のスポットとして多くの人を訪れている。なお、桜を植えるという発案自体は町役場によるものではなく、町役場としては補助金を提供することや、町政 50 周年を活用することなどの提案は行なったが、相互に協力するという形だったという。

2 点目は、活動において実際に現地で共同作業を行っているという点である。月 1 回概ね土曜日、8 月以外の年間 11 回、活動を行っているという。なお、活動日の連絡も役場の職員が行っている。手段は、メールではなく、手紙で日時を知らせるという。なお、ゆめの里育て隊へのインタビューについても活動日の作業後に行われた。インタビュー当日の活動には、役場の職員 5 名が参加していた。役場との関係性についての質問に対して、「こんな風にみんな(役場の皆さん)が来るから行こうかなと思ったりとか、そういう時もありますよ。だからできるだけ体が続く限りは行ってみよう行ってやろうかなという気はあります」という発話があり、この点については、ゆめの里育て隊へのインタビュー内容を、本項で先んじて記述することとした。なお、課題としては、おおいゆめの里は、知る人ぞ知る絶景スポットではあるが、「知名度が低い」ということであった。次項では、この「ゆめの里育て隊」へのインタビューについて記述する。

#### 4-3. 定性調査②ゆめの里育て隊隊長及び隊員を対象とした半構造化インタビュー調査

前項の大井町役場へのヒアリング調査で知ることができた「ゆめの里育て隊」の活動内容を踏まえて、ゆめの里育て隊隊長及び隊員を対象に半構造化インタビューを行った。

現在の活動の目的については、「この地域を管理するとか、草刈りをするとか、剪定をするとか、そういうようなことが目的」であり「影の仕事ですね。地域振興課で、いろいろな農産物の収穫体験とかやるときに、綺麗にしておれば、来ていただいた方々が、綺麗にして、管理できているとか、そういうふうに思うでしょう」と回答を得た。

「どのようなきっかけ(動機)で活動に参加するようになったか」及び「どうして長年もの間活動を継続することができているか」についてのインタビュー結果から、地域の持続的

---

<sup>31</sup> 大井町観光サイト「おおいゆめの里」<https://www.town.oi.kanagawa.jp/site/kanko/yumenosato.html>  
(2023.12.25 アクセス)

発展に寄与する価値共創の要素として、①人的つながり②地域貢献への思い③自己実現④相互の学び・交流の4つの要素を抽出した。

1つ目の要素は「人的つながり」であり、人と人のネットワークが組織づくりにおいて大切であるということである。「この育て隊の組織があって活動されていて、私は、住まいが地元なのですが、たまたまそういう方が先におられて、それで誘われて、『どうだ、こういう組織で今ボランティアやっているから仲間に入らないか』ということ」という誘いや、「勤めていたところの近くの方に、『草刈り上手だから手伝ってくれんか』と言われたものだから、手伝って今に至ってる」というような、人と人のつながりが参加のきっかけとなっていた。

2つ目の要素は「地域貢献への思い」であり、地域に貢献したいという思いがモチベーションになっているということである。「地域のために少しでも貢献できれば」「地域のためになればと思って」「地域の皆さんにさんざんお世話になったので、まあ、体が動く間は、これからもボランティアでも何でもいいのですが、地域のためになればと思って参加し始めたんですね。ですから、体の動くうちは、もっと参加して（活動を）やろうかな、と思っていきます。今までのお礼のつもりで」というように、地域に貢献したいという思いが、参加やその継続の動機になっていた。なお、「活動でやりがいや幸福（感）を感じる時は、どのような時か」という問いに対して、「やりがいっていうよりも使命感の方が強いですよ」という発話があり、貢献したいという思いより強い、使命感にまでつながっているケースも見られた。また、大井町について、「この場所（おおいゆめの里）はね、私も好きでね、足柄平野でこれだけの風景のところはないんです。富士山の裾まで見られる。大井町はどこでも富士山が見られるっていう風に言われてるんです」「いいところですよ。これを何か利用しなければね。自然なものだもん。手をかけたものじゃないもん。私もあちこち写真撮りに行くけどね、富士山、この界限では富士山一番だね」「ものすごく夜の景色が綺麗なので、なんとか活かしたいよね」という発話があり、当該地域に誇りを感じていることが、地域貢献への思いに通じているということが推察された。

3つ目の要素は「自己実現」であり、自分の持っているスキルを活かすことができるという自己実現の要素が活動の継続につながっているということである。この点は、「たまたま私の場合、植木の知識があるのでね。そのままね、一緒に入って、それからずっとやっているのですよ」「普段農業やっていますから、草刈りとかは慣れているので、『じゃあわかったと、じゃあ協力しますよ』ということと今までやっている」という発話から、得意なスキル、知識を活かすことができるということで、活動が自己実現の場ともなっているのではないかと推察された。

4つ目の要素は活動を通じた「相互の学び・交流」である。「私の場合、植物が好きで、結構（植物について）勉強したんですよ。（地域の）小学校の子どもに山ゆりのはやし方とか、そういうのを教えてあげたりしてね」「（植物のことなど）ここに参加していると自分も勉強になるっていうところですね。結構役に立ったことがあるんですよ。早めに来た時に農家

の人に話を聞いたりしてね」などの発話から、活動の場での交流を通じて、相互の学びにつながるということが、活動継続へのモチベーションを持続させる要素となっているのではないかと推察された。

他方、「(旅行先の) お土産屋さんで、どこからきたかを聞かれて、大井町と言っても絶対わからない」という発話にもみられるように、地域の認知度の低さや地域ブランドとして定着していないことが課題となっている。そこで、地域のブランド・マネジメントの一環として、積極的なプロモーションを推進していくことが重要であると考え。また、「今後どのような形での活動を希望しているか。若い世代に参加してほしいか」についての質問に対して、「それはありますよ。若手の人がある程度占めてくれれば、メンバーに入ってくれば、だんだん引き継いでいけますよ、組織的には。そのまあ、大井町でうまくやってる、(ゆめの里) 育て隊という組織がありますよ、こういうような作業してますよ、いつ (活動を) やってますよとかいう PR が少ないから、(活動を) 知らない人も多いじゃないですか」という発話があり、ブランド・マネジメントにおける PR の観点、若い世代が地域に貢献するという観点において、今後も昭和女子大学が大井町と共に取り組んでいるプロジェクト活動においても貢献していけるのではないかと考える<sup>32</sup>。

#### 4-4. 活動の成果

大井町役場より提供された令和 4 年度 (2022 年度) 四季の里事業報告書によると、令和 4 年度 1 年間で、大井町農業体験施設である四季の里における施設利用者数<sup>33</sup>については、総計 3,307 人、体験事業の参加者数は 1,941 人であった。また、令和 4 年度におけるおおいゆめの里での「四季の里 里山花まつり」期間来場者数は、18,573 人 (推計) であった<sup>34</sup>。新型コロナウイルス感染症による影響はあったものの、これらの数値から一定の成果があったと考えられる。

この背景には、大井の里体験観光協会の多様なプログラムの企画・実施、そして、ゆめの里育て隊の整備を中心とした作業は、大変重要な役割を果たしていると考えられ、交流人口を増加させるという目標に対して確かな成果をあげつつあり、今後も活動の継続・発展が期待される。

---

<sup>32</sup> 今年度のプロジェクト活動では、2023 年度 3 月開催のおおいゆめの里でのイベント (四季の里里山花まつり) における企画実行のため、2023 年 12 月末から 2024 年 2 月中旬まで、昭和女子大学の学生メンバーと大井町役場によるクラウドファンディングを実施した。また、2023 年 8 月の「大井よさこいひょうたん祭り」での出展 (ひょうたん和紙貼りのワークショップや、ひょうたんを使用した小物の販売等)、同 11 月に開催された昭和女子大学の学園祭「秋桜祭」での大井スイーツの販売、同 12 月に実施された上大井駅 (通称ひょうたん駅) でのクリスマスイルミネーションイベントでの展示 (ひょうたんを使用し学生メンバーが企画・制作したクリスマスデコレーション等の展示) などの活動では、地域活性化の一翼を担うことができたと考えられる。

<sup>33</sup> 体験室 (2 室)・ピザ窯・バーベキューコンロ・旧直売所・加工所における利用者数の総計。

<sup>34</sup> 大井町役場提供資料による。令和 4 年度来場者数の集計対象期間は、2 月 18 日～3 月 12 日。来場者数は駐車台数×3 で算出。駐車場開放時間は 9:00-17:00 である。なお、徒歩 (ハイキング) での来場者と時間外の来場者は数値に含まれていない。

## 5. 定性調査結果の考察と今後の研究課題

大井町においては、大井の里体験観光協会を設立し、地域課題の解決につながる「協働」を法人設立による仕組み化により実現していた。同協会が前述のプラットフォームそのものであり、町内外の住民の協力を得て町の課題解決を試みていると考えられる。そして、本ケースでは、人と人、組織と組織などの調整・コーディネート役が必要であり、かつ重要であるということが示唆されたが、持続可能な地域の発展を目指す上で、マネジメントやリーダーシップのあり方も変化してきているということであろう。Kavaratzis (2012) は、地域ブランドについて、「集団としても個人としても地域ブランドに意味を持たせている多くの地域関連のステークホルダーによって共創され (co-created)、共同マネジメントされる (co-managed) ものである<sup>35)</sup>」とし、さらに、これからのマネージャーのあり方として、「自分たちを地域ブランドにおける対話のリーダーとしてとらえるべきであり、地域ブランドの意味をめぐる複数のステークホルダーグループ間の対話のイニシエーター、ファシリテーター、モデレーターとして行動すべきである<sup>36)</sup>」と提言している。さらに、Kavaratzis & Hatch (2013) においても、地域ブランドにおけるリーダーシップについて、「伝統的な政治的リーダーシップとしてではなく、どちらかという、地域ブランドの意味を交渉する模範的なエンゲージメントとして考えられるべきである<sup>37)</sup>」と見解を示しており、リーダーシップやマネジメントのあり方が変化してきているということが示唆されている。大井町役場の職員からのヒアリング内容から、ワークショップなどを通じて、対話を重ね、ステークホルダーのニーズを理解し共に実現できるようにすることを大切にしていることが示唆されたが、役場のリーダーシップもトップダウン型から上記のあるべきリーダーシップのあり方が変化しているといえるだろう。また、國領 (2011) が「プラットフォーム上で生じる創発」を対象とした創発概念について、「複数の主体が相互作用することで、必ずしも予測できない付加価値が生み出されること<sup>38)</sup>」と説明しているが、コーディネート役として、「人づくりと人のネットワークをつなぎあわせることで、次から次へとつながっていき、予想していなかった反応や相乗効果を起こすことがあり、そうするとまた別のものに発展していく」というヒアリング内容は、まさに「創発」に値すると考えられる。さらに、人材育成の重要性が、ヒアリング調査を通じて示唆された。人材育成の重要性については、飯盛 (2015) においても指摘されているが、「地域のよさ、資源を見極め、課題を正面から受け止めた上で、さまざまな組織、関係者を巻き込みながら見事に資源化を果たしている」ような地域づくりのリーダーを「プラットフォーム・アーキテクト (platform architect)」(社会的創発をもたらす場づくりのできる人) とし、このような人材育成については重要なテーマであるとしている<sup>39)</sup>。また、前述のプラットフォームの重要な設計変数の一つであるイン

<sup>35)</sup> Kavaratzis (2012) p.15. 和訳は筆者による。

<sup>36)</sup> Kavaratzis (2012) pp.15-16. 和訳は筆者による。

<sup>37)</sup> Kavaratzis and Hatch (2013) p.82. 和訳は筆者による。

<sup>38)</sup> 國領 (2011) p.18.

<sup>39)</sup> 飯盛 (2015) pp.162-164.

センティブの設計に、ケースにもよるが、対価を支払うことを仕組みとして取り入れるということが今後の持続可能な地域の発展に必要な要素の一つなり得ることが示唆された。

ゆめの里育て隊を対象とした半構造化インタビューにおける、活動のきっかけ（動機）及び継続の理由（モチベーション）についての質問への回答（発話）から、地域の持続可能な発展につながる価値共創を生じさせるプロセスの要素として、①人的つながり②地域貢献への思い③自己実現④相互の学び・交流の4つが抽出されたが、これらについては、プラットフォームのインセンティブ設計をする上で、必要な要素となり得るであろう。

大井町の地域ブランド・マネジメントにおいては、豊かな自然を観光資源として、交流人口を増やすべく、体験価値の提供及び、体験の前提となる「認知度」の向上に向けて、積極的なプロモーションの推進が求められている。本稿では、こうした目標に向かって、協働していくことにより、地域の持続的な発展に寄与する価値共創プロセスについて、大井の里体験観光協会とゆめの里育て隊を事例として、定性調査の結果の記述と考察を行った。

本稿における限界は、大井町の一地域に限定して調査を行っており、個別性も含まれると考えられるという点である。今後の課題として、先行研究と定性調査の結果から仮説を導出し、定量調査での検証することにより、精緻化し、理論の構築を試みる。

## 謝辞

本稿で記述したヒアリング調査、及びインタビュー調査においては、神奈川県大井町役場の皆様、ゆめの里育て隊の皆様に多大なご協力をいただいた。この場を借りて深く感謝申し上げます。

## <参考文献>

飯盛義徳（2015）『地域づくりのプラットフォーム：つながりをつくり、創発をうむ仕組みづくり』学芸出版社。

一般社団法人大井の里体験観光協会ホームページ「ABOUT US」

(<https://taikenkankou.com/aboutus.html>) 2023.12.25.

大井町観光サイト「おおいゆめの里」

(<https://www.town.oi.kanagawa.jp/site/kanko/yumenosato.html>) 2023.12.25.

大井町観光サイト「ひょうたん」

(<https://www.town.oi.kanagawa.jp/site/kanko/hyoutan-kanko.html>) 2023.12.25.

大井町協定のガイドライン 大井町 令和3年3月

(<https://www.town.oi.kanagawa.jp/uploaded/attachment/6641.pdf>) 2023.12.25.

大井町第6次総合計画「つなごう！大井未来計画」（2021～2030）

(<https://www.town.oi.kanagawa.jp/uploaded/attachment/6651.pdf>) 2023.12.25.

大井町ホームページ「トップページ」(<https://www.town.oi.kanagawa.jp>) 2023.12.25.

大井町ホームページ「ようこそ町長の部屋へ」

- (<https://www.town.oi.kanagawa.jp/site/mayor-room/>) 2023.12.25.  
神奈川県足柄上郡大井町の体験観光ガイドブック  
一般社団法人神奈川大井の里体験観光協会  
広報おい平成 23 年 11 月 1 日「特集」おれたちゆめの里育て隊  
國領二郎、慶應義塾大学 SFC 研究所 プラットフォームデザイン・ラボ (2011)『創発経営  
のプラットフォーム：協働の情報基盤づくり』日本経済新聞出版社。  
近藤敏夫 (2009)「インタビュー調査の技法—現象学的社会学の具体的応用—」『佛大社会学  
=Studies in sociology』34、1-13 頁。  
昭和女子大学プレスリリース 2021.07.20  
(<https://www.swu.ac.jp/news/nid00003126.html>) 2023.12.25.  
田中道雄、白石善章、濱田恵三編著 (2012)『地域ブランド論』同文館出版。  
徳山美津恵、長尾雅信、若林宏保 (2017)「地理学的視点を取り入れたプレイス・ブランデ  
ィング・モデルの可能性—瀬戸内ブランドからの検討—」『日本マーケティング学会カ  
ンファレンスプロシーデングス』6、173-184 頁。  
村松潤一 (2015)『価値共創とマーケティング論』同文館出版。  
矢口芳生 (2021)『地域経営論』農林統計出版。  
和田充夫・菅野佐織・徳山美津恵・長尾雅信・若林宏保 (2009)『地域ブランド・マネジメ  
ント』有斐閣。  
Grönroos, C. and Gummerus, J. (2014). “The Service Revolution and its Marketing  
Implications: Service Logic vs. Service-Dominant Logic”, *Managing Service Quality*,  
24 (3), 206-29.  
Kavaratzis, M. (2012). “From ‘Necessary Evil’ to Necessity: Stakeholders’ Involvement in  
Place Branding”, *Journal of Place Management and Development*, 5 (1), 7-19.  
Kavaratzis, M. and Hatch, M.J. (2013). “The Dynamics of Place Brands: An Identity-  
Based Approach to Place Branding Theory”, *Marketing Theory* 13 (1), 69-86.  
Lusch, R.F. and Vargo, S.L. (2014) *Service-Dominant Logic: Premises, Perspectives,*  
*Possibilities*, Cambridge University Press. (井上崇通(監訳)・庄司真人・田口尚史  
(共訳). (2016)『サービス・ドミナント・ロジックの発想と応用』同文館出版.)  
Zenker, S. and Braun, E. (2010) “The Place Brand Centre – A Conceptual Approach for  
the Brand Management of Places”. Paper presented at the 39th European  
Marketing Academy Conference, Copenhagen, Denmark, 1–4 June.

## 付録

### ゆめの里育て隊インタビュー結果

以下の表においては、極力インタビュー回答のまま記載しているが、内容をわかりやすくするために、一部補足・省略等をしている。なお、氏名等の個人情報は、個人情報保護の観点から記載していない。

付表 1 ゆめの里育て隊の活動参加のきっかけ（動機）

回答 1	私の場合は、この育て隊の活動の計画がされたとき、その前に（ゆめの里の構想における）設計があって、そのときに私も参加させてもらって、それからたまたま私の場合、植木の知識があるのですね。そのままね、一緒に入って、それからずっとやっているのですよ。ただ実際は、やっぱり地域のために少しでも貢献できればという思いで入りました。
回答 2	私は当初からではないのです。この育て隊の組織があって活動されていて、私は、住まいが地元なのですが、たまたまそういう方が先におられて、それで誘われて、「どうだ、こういう組織で今ボランティアやっているから仲間に入らないか」ということで。普段農業やっていますから、草刈りとかは慣れているので、「じゃあわかったと、じゃあ協力しますよ」ということで今までやっているのですが、まあ、そういうようなことがきっかけですね。
回答 3	地域の皆さんにさんざんお世話になったので、まあ、体が動く間は、これからはボランティアでも何でもいいのですが、地域のためになればと思って参加し始めたんですね。ですから、体の動くうちは、もっと参加して（活動を）やるのかな、と思っています。今までのお礼のつもりで。
回答 4	自分も、始めてからずっとやっていますが、自分の体が続く限りやっていきたいと、そういう気持ちだけですね。皆さんと一緒にね、ボランティアみたいに。
回答 5	ドライバーをやっているのですが、刈払機の免許を持っています。ただその始めた理由というのは、免許だけじゃなくて、勤めていたところの近くの方に、「草刈り上手だから手伝ってくれんか」と言われたもんだから、手伝って今に至ってるわけなんですけど、草刈りの免許を持っているというのは、勤めてたところで必要になったから。
回答 6 （大井町役場を退職後、活動に参加した隊員）	私はこのボランティア組織の立ち上げを最初はお願ひする立場におりました。相和構想（「いこいの里・相和」整備構想）の一つとして四季の里をつくっているということで、いろいろ町自体ではどうしてもやりきれないというようなところがありまして、その前からボランティア組織を立ち上げたらどうだという有志の方もいらっちゃって、そんなふうな話が盛り上がったところで、実際にお願ひしてボランティア組織をつくっていただいたというような状況にありました。（組織を）つくっていただいて、皆さん熱心にこの四季の里を愛していただいて、献身的にボランティア活動に従事していただいているというところがありまして、私もそういう立ち上げのきっかけにおりましたので、本来は率先垂範してこの活動にも携わっていかねばいけないんですけど、なかなかそうもいかなくて、欠席する機会というのは非常に多いんですけど、継続してやっていただいていることには心から感謝していますし、また私も一員としてこれからの活動には参加していきたいと思っています。

付表 2 活動を続けている理由

回答 1	私の場合、植物が好きで、結構（植物について）勉強したんですよ。（地域の）小学校の子どもにも山ゆりのはやし方とか、そういうのを教えてあげたりしてね。結構そういうことをやっているんですよ。最初、（ゆめの里の構想におけ
------	--



	る) 設計の段階でも、東京の設計屋さんだったけど、何回もやったけど、結局ね、町でも予算がないってことで、だからね、じゃあ、(予算の関係で構想を実現することが) できないならできないで、しょうがないから、我々で、あるものでやろうって植えようと思ってさ。そういう風にやってきたのがある。
回答 2	私は、商売(本業) やってて参加してるんですけどね。自分も勉強になるもんね。私も植物嫌いじゃないから、いろいろ話を聞いてもね。植木の剪定の仕方だとか、本業では知らないもんね。その話を聞いただけでもね。ただ(植物のことなど) ここに参加していると自分も勉強になるっていうところだね。結構役に立ったことがあるんですよ。早めに来た時に農家の人に話を聞いたりしてね。結構勉強になりますよ、私はね。
回答 3	写真撮るのが好きでね。小学校の頃から大体その年齢の頃からずっと写真撮ってるもんだから、山の中の写真を撮ってたんです。竹林があって、綺麗に草を刈って(写真をとったら) その写真がすごい綺麗に写ってたんだ。山の上に柿の木があるから、柿の木の写真撮ってるけどね。早い時は 11 月にはもう水仙が咲いてるんですよ。11 月の終わりくらいに咲いてるんですよ。その水仙の写真を接写できる。接写っていうのは、すぐそばで撮る水仙のみを撮るっていうような、いろいろな技術があるから、それを撮ってテレビ(画面) で映して、自己満足っていうか、そういうような感じだけど。夏にはサルスベリが一面咲いてる。

付表 3 主な活動の目的について

回答 1	ここの地域を管理するとか、草刈りをするとか、剪定をするとか、そういうようなことが目的じゃないですか。影の仕事ですね。地域振興課で、いろいろな農産物の収穫体験とかやるときに、綺麗にしておれば、来ていただいた方々が、綺麗にして、管理できているとか、そういうふう思うでしょう。そうしたことが(目的の) 仕事です。
イベントの開催について	3 月は花まつりとかをやったり、あとここでは年 4 回、ここの敷地でお祭りをやったりしています。皆さんに草刈りをやってもらうことによって維持されてるっていうようなことなんですけど、(それがないと人が来ても) 草ぼうぼうになっちゃう。(大井町役場職員による補足)

付表 4 活動における役場との関係性・活動状況について

回答 1	本当に役場の方がよく来てくださるって思うんだけど、仕事だからといったとしても、土日でしょ、そこにこれだけ来てくださると本当にね。地域振興課は大変だなと思うんですよ。本当に大変だと思う。本当に我々より大変だと思う。こんな風にみんな(役場の皆さん) が来るから行こうかなと思ったりとか、そういう時もありますよ。だからできるだけ体が続く限りは行ってみよう行ってやろうかなという気はあります。
回答 2	本当はもっと人数いたんです。当初は、全員だったら 30 人くらい。月に 1 回、毎回全員ではないけど、都合の悪い人もいるから。前は、職員数よりボランティア(隊員)の方が倍ぐらいきていた。今はだんだん(隊員の)年齢が高齢化して、体の方がきかないとなかなか参加できない。そんなこともあって今は役場の職員の方にだいぶ負担をかけちゃってるっていうような状態です。
回答 3 (回答 2 に対する質問: 隊員の活動人数の減少理由)	人数が減ったのは、やっぱり年齢じゃないかな。ちょっと体が動かなくなったとか、病気にしちゃったとか、今現在 12 名ですね、登録者数が 12 名です。家族も健康じゃないとね。家族がやっぱりそういうね。例えば女房が寝たきりになっちゃったとかってなったら来られないよね。やっぱり家族も健康だから(自分達は活動に) 来られる。ボランティアって、私はそうだなと思ってますよ。健康だからできるよ。
回答 4	免許証があるからここまでこられるけど、免許証がなくなっちゃったらね、迎えに来てもらわなければ来られないよ。自転車だったら大変だよなって、

	今朝、話をしたんですけど。きたくてもね、免許証がなくなったら、草刈機持ってさ、自転車で来るのは大変だな。
--	--

付表 5 ゆめの里における桜の植樹について

回答 1 役場職員	桜については、町政 50 周年で募集して、人それぞれで植えたという感じですよ。(質問:それぞれ個人的に植えたということで、この植樹については役場主導だったのか。)そうですね。(町政 50 周年を活用するなどの提案については)町が主導でしたね。
回答 2 (大井町役場を退職後、活動に参加した隊員)	ですけどね、その頃はまた、別の組織がスイセンの球根を植えてくれたりね、そんなこともしていただいたっていうケースもあり、いろんな人の善意があって、町も全てがやりきれないので、いろんな形でいろんな人がここをつくるためには携わっていただいたっていう経緯があります。(質問:当時は、大井町役場として携わっていたのか。)そうですね。だから、植樹の記念の式典をやったりもしましたけど、いろんな形ではいろんな人が携わってもらっています。町だけがやったわけじゃないですよ。いろんな形でさっき申し上げたように、スイセンの球根を植えてくれたりしていただいたというのはありましたね。
回答 3	50 周年で、私は、(桜の木を)孫の名前で植えたんですけど、二度倒れちゃって、まだこれくらいです。
回答 4	(質問:植樹に関しては地域の活性化を目的として植えたということか。)早咲きの桜で人を呼ぼうっていうのがあったのでね。そんな形で、今いろんなところから人が来られるっていうのは、テレビなんかで早咲きの桜をとりあげてもらったりすると、人がそれを見ると途端に増えるわけですよ。おそらくそんな機会にここを知っていただいた人が、さっき言われたようにここでお昼を食べて伊豆に行くとか、リピーターみたいな形で、おそらく利用されてるんじゃないかと、あの時は関東のいたるところからお客さんが来てたんでそんな機会があるんで、知ってもらってるのかな、というような感じですので、やはり、何も手を入れなければ原野に戻るわけなんで、ボランティアの活動でね、散策路の整備とか、草刈りをやったりして綺麗にしておこう、ということでやっています。

付表 6 大井町について<sup>40</sup>

回答 1	この場所(おおいゆめの里)はね、私も好きでね、足柄平野でこれだけの風景のところはないんです。富士山の裾まで見られる。
回答 2	大井町はどこでも富士山が見られるっていう風に言われているんです。
回答 3	町も綺麗だしね。夜景も綺麗だし、ものすごく夜の景色が綺麗なので、なんとか活かしたいよね。
回答 4	いいところですよ。これを何か利用しなければね。自然なものだもん。手をかけたものじゃないもん。私もあちこち写真撮りに行くけどね、富士山、この界限では富士山一番だね。
回答 5	観光客は町外からよく来ます。観光バスに乗って来られたり、桜(を見にきたり)とか、特に夏だと子どもが夏休みですから、子どもを連れてカブトムシをとりにきたり、(町外から)よく来ているんです。小学生も結構来ています。地域外の人に来ています。だからこの桜を見に来る方の車のナンバーを見ればどこから来ているか、すぐ分かる。横浜や東京からもいらっシャっている。(町外から)来られるから、余計に草だらけにして人が入らないような状態じゃ困るわけです。綺麗になっていけば、人が入る。
回答 6	こないだもご夫婦がベンチで「千葉から来て、ここで朝ご飯を食べて伊豆に行くんだ」とおっシャっている方がいました。「何度も来ているんですよ」と。やはり知っている人は知っている。「お弁当を食べてこれから伊豆に行くんで

<sup>40</sup> 本項目(大井町について)は、質問項目としてではなく、インタビューの流れの中で、発話された内容をトピックとしてまとめて記述した。

	す」と。だからやっぱり知ってる人は知ってる。もうちょっと（町外の方が）お金を落としていってくればよいけど、落とす場所がない。
回答 7	私の知り合いは、桜を見て、写真を撮るために、飛騨高山から来ます。高山からだと、富士山と桜を撮るところないって言って、桜が咲くと電話するんですよ。そうすると 5 時間かかるんです。
回答 8	日本全国、東北に旅行なんかに行くじゃないですか。お土産屋さんで、どこからきたかを聞かれて、大井町と言っても絶対わからない。箱根って言ったらわかる。小田原って言ってもわからない。湘南って言ったらわかる。東京の大井町って勘違いする。箱根って言ったらわかる。九州、北海道行っても、箱根って言ったら分かる。かまぼこで有名なんだよなって言ったらわからない。

付表 7 活動でやりがいや幸福（感）を感じる時は、どのような時か。

回答 1	やりがいっていうよりも使命感の方が強いですよ。本当にやりたくてやっけるっていうわけじゃない。どっちかという、使命感が強い。ここをきれいにしてあげないと管理しておかないと、お客さん来て困るだろうとか、ちょっとみっともないよねとか、逆に使命感の方が強い。
回答 2	使命感というか、どうしても「育て隊」という以上、やっぱりやらないといけないことがあるんですよ。そういうこともあるんですけど、最終的には、皆さんがね、喜んでもらえるじゃないですか。（そして）やっぱりね、仲間がいるでしょ、いろんな話ができるんですよ。だからね。いろんなことがあるんだよね。情報というか、私の知らないことを教えてもらったりできるしね、そういうことも個人的にはあります。

付表 8 大井町にどのような町になってほしいか。

回答 1	ほとんどが二人暮らしとか、そうなっちゃって、若い人は全然こっちに住まない。結局、就職とかなんかで出ちゃう。私の子どももそうだけど、大学出でずっと外でしょ。農業を継がせようとしても、結局わかんない。年だから子どもを増やすこともできないし、本当に過疎化ですよ。私の代の人間が亡くなれば、もう空き家になっちゃうのがほとんどです。だからそれは我々が考えてというのは難しいので、国とか県の方で、ある程度の（土地の流通についてなど）政策をしないと家が立つこともできない。若い子の声が聞こえないというのは。私もボランティアで登校の（見守り）をやっていたけど、1-2 年前（までやっていた）かな。子どもとの触れ合うことは自分も好きだったし、10 年くらいやらせてもらった。子どもの声を聞くっていうのはやっぱりパワーをもらえる。そういうのが今、聞こえない。ところどころ、赤ちゃんがいるけど、少ない。だから一緒に話すこともできないし、みんなが集まってね、騒ぐこともないし、そういうのはちょっと寂しいよね。
回答 2	（質問：町が賑わうということで、外から観光客・移住者に来てほしいという思いはあるか。）子どもさんが来ればね、親はついてくる。だから、子どもたちが来る公園とかそういう施設があればいいなど。ということは、今役場の地域振興課が、頑張ってるだけ、一つそこに観光課とかがあるとかかなり力が入る。予算もとれると思う。よくわからないけど、タウンニュースとかなんかでとりあげられるのが大井町は少ないのね。だからそういうのを今考えているのだけど、観光課があれば、いろいろな意味で PR をもっとできると思う。そうすれば、自然と人が集まるんじゃないかな。まあ先に立つもの（予算）のことがあるから難しいけれど、ここを開発したら、一大事業ですよ。「春はこれで楽しめる。夏はこれで楽しめる。秋はこれでいいね」となればよい。
回答 3	人口を増やしてもらいたいということだね。そういうものやってね。だんだん人口が増えてくればいいなど。本当に過疎化地域になっちゃって。いろんなものができてくれば、人口も増えてくるのではないかなと思う。

付表 9 今後どのような形での活動を希望しているか。若い世代に入ってきてほしいか。

回答 1	それはありますよ。若手の人がある程度占めてくれれば、メンバーに入ってくれれば、だんだん引き継いでいけますよ、組織的には。そのまあ、大井町でうまくやってる（ゆめの里）育て隊という組織がありますよ、こういうような作業してますよ、いつ（活動を）やってますよとかいう PR が少ないから、（活動を）知らない人も多いじゃないですか。
回答 2	やっぱり我々がね、年代が上がっちゃってるから、若い人との話が合いませんよね。だから、私も聞いた話なんですけど、会は 20 年で衰退するが、会社は 20 年すりゃ発展するって言うんですよ。というのは、会は 20 年入った時のままずっと年をとってるからだけど、会社が次々と新しい人が来て定年で辞めてって、（また）若い人が入ってくるんだっていうことを聞きましたよ。会をね、維持するっていうのはね、私は大変だと思います。60（歳）で入ったってね、20 年したら 80（歳）じゃないですか。そういう年代の人ばかりになってしまった。
回答 3	（現状は）メンバーが、みんな声をかけてもらいながら、誘って、来てもらって、そこで新陳代謝があるというような状況ですね。このところ、そういうのが停滞しています。